

1. 「これだけは、言っておきたいこと」

まず、「これだけは、言っておきたいこと」を伺った「聞き取り項目」欄の内容を整理してみる。ここには、「強制収容」・「絶対隔離」政策の本質が、これによって退所者の被った被害の全体像、それに対する退所者の痛憤、思いや願い、すなわちその生き方として凝縮して語られているからである。

(1) 全てを失った - 「人生被害」とその思い

被害は、まさに人生総体にわたる人生被害である。こうした被害の実態を後世に伝え残して欲しいとの願い、今回の調査を区切りに前向きに生きていこうという強い意思が示される。

「調査を受けたのは、なぜ自分がこの人生被害を受けなければならなかったのかを明らかにしたいからである。医師の『ハンセン病』『入所しなさい』の一言で、34才まで積み重ねてきた人生(一家の大黒柱としての役割、新聞社の仕事、新築の家、ふるさと)をすべて一度に失った。残された妻子は極貧の生活を味わい、家庭はこわれた。取り返しのつかない人生被害を受けた。既に当時の医師は亡くなっていて直接尋ねることはできないが、他の地域の医師に出会っていれば外来治療の可能性もあったのではないか。『治る病気だ』という説明があれば、自殺する程苦しみ、すべてを置いて島から逃げ出し園に入る必要もなかったのではないか。あのハンセン病のおそれ、差別を生んだのは予防法であり医師ではなかったか。無料皮膚診療所はハンセン病刈りで、私は新患発見対策の犠牲者ではなかったか。

家も仕事もすべての財産をなくし、取り返しのつかない人生被害を受けた。800万円の賠償に不満を言うつもりはないが、その人生被害で失ったものに比べると800万円は人生の一年分くらいの額でしかない。しかし、そのような金額よりも、この交渉の中で自分の心が回復したことが最も価値のあることである。くやしさをバネに書いた本は、表彰され、講演も依頼された。親戚の誇りとして迎えられた。今の島はハンセン病退所者の受け入れも活発な進んだ地域となった。しかし、もう島には戻れない。暮らすことはできない。」(1944年生 男性)

「らい予防法があり、いろいろな差別があったこと、退所してからもかくし続けなければならないこと、このようなことは後世に残してほしい。会社のTV等でハンセンのことを見ると、いたたまれなくなりその場をはずしてしまう。社会の中にも偏見を感じると「やっぱり話せない」と思う。なるべくならハンセン病から解き放たれたいと思う。他の病気なら治ったら終わりなのに、この病気はいつまでもついてまわる。切りたいのに切れない。墓に入るまで持って行かなければいけないだろうと思う。受け身で生きてきたところが多いので少しでも何かできればと思い、視覚障害者のボランティアもしている。あまり後ろを振り返るのはやめたい。今回このような話をし、1つの区切りにできたらと思う。昔はあであったこうだったと振り返るのではなく前向きに生きていければいいと思う。」(1950年生 女性)

(2) 隔離がいけない - 隠して嘘について暮らす

病気を隠し、療養所にいたことを隠すためには、必然的に嘘をついて暮らさねばならない。それはまた、周囲の環境や人々から、自らを「気持ちのベール」で覆うことだったと言える。それはまさに、「なぜそんなに隔たりがあるのか、何かあったのか」と詮索されぬように、人々に「ベール」の存在を気取られぬように薄く、そのために常にその綻びを恐れ、繕わなければならないという負担として、退所者の生活を制限するものでもあった。

「若い頃から、ずいぶん苦労してきましたけれども、裁判闘争があって、それで、原爆なみの支援金などもいただいて、自分の働いた分の年金も合わせて、生活は非常に楽になりました。その辺は政府に対して非常に感謝していますよ。ただ、苦しかったけど、苦しい思いをしてきたんだけど、ウソをついてウソがウソをついて、暮らしてきたんだけど、妻子にも自分の過去は話をしていない、かくしたままですが、家内はウスウス知っていますと思います。はっきりは言っていないんですよ。子供は100%わかりません。

制度を作るなら、そのような実効、保障のある制度までつくればいいわけですよ。それで、かくれてでも生活はできたはずだけど、保障もない制度でしょ、要するに強制的に収容して、無理矢理カクリしたりしてね。その後は、何の保障もなかったですからね。それが一番いけなかったんじゃないかと思いますよ。」(1937年生 男性)

「気持ちのベールがある。一生続くと思う。自分から、他人へハンセン病元患者であることは話せない。」「ハンセン病のアンケートはお願いされても、自分がお願いすることはできない。元患者であることは絶対にバレたくない。」(1941年生 男性)

(3) 社会に出て失敗

他方で、社会生活におけるあまりに大きな困難は、社会に出て失敗だったという痛切な思いになる。

「社会に出て失敗した。多磨にずっといれば楽だったと思う。社会で生活するのは大変。神経ばかり使ってきた。病院に行っても長い時間待たなくてはいけない。」(1959年生 男性)

「出てからがむしろ大変だった。毎月毎月園に来なければならない中での仕事が大変だった。」(1930年生 男性)

「これからの方が大変。今はこれからどう生きるか考えられない。ホーム、宗教関係でのケア、行き場所、どれもまだ分からない。しばらくは今のままで。これから社会に出る50代、60代は大変。社会の流れに乗れないと思う。若かったので自分は何とかできた。」(1951年生 男性)

(4) こどもが産めなかった

肉親や医師に「産まない方がよいと言われ」、こどもが産めなかった人の嘆き。しかも、医師からの意見は、平成に入ってからのことである。人権感覚の欠如した医師の責任は大きい。

「『子供を産まないほうがよい』と言われたことで、人生が決められてしまった。もしかしたら子供も産んでいたかもしれない。『なんでそんなこと言ったのか』それだけは言いたかった。母親があれだけ苦しんだということ。昔からの病気のイメージが母を苦しめていたのだと思う。平成に入って結婚した。結婚について、夫の母が病気のことを気にして、私に同意の上で主治医に電話をかけて聞いたことがある。その後、夫と私と夫の母を前に主治医が『子供は産まない方がよい』と言った。私だけに言うのではなく皆の前で言うなんて！

子供がどうしても欲しいと思っていたいかなかったこともあり私の結婚生活は子供を産まない生活に決まってしまう。医学的に産んではならないことでもないのに、『産まない方がよい』と主治医から言われたことがどうしても許せないと思った。私の人生が違っていったかもしれない。ささえられて今は幸せだが、どうしてもそのことが気になった。」
(1957年生 女性)

(5) 家族・こどもが一番心配

一番思いをかけ、心配なのは自分以上に家族のことである。

家族、こども

「自分の亡きあとのこと。子供、家族のことが心配(1番に言いたいこと)」(1952年生 男性)

兄弟

「自分以上に精神的に苦労したのは自分の兄弟であり、よく我慢してくれたと思う。」
(1941年生 男性)

(6) 墓場まで

病気のことを隠している人は、墓場までもっていく決意をしている。

「自分の病気のことを、今では、知られてもよいと思うことがある。今や、世間では、それほど差別はなくなってきたし、自分自身もずぶとくなってきた。しかし、結局、このことは、墓場まで誰にも言わずに持っていこうと思っている。これは、どんなに補償制度を充実させても解決できない、自分の中に生じてしまった恐怖心から来るものであり、きっと被害者の誰もが持っている負担だと思う。」(1947年生 男性)

「社会の中にも偏見を感じると「やっぱり話せない」と思う。なるべくならハンセン病から解放されたいと思う。他の病気なら治ったら終わりなのに、この病気はいつまでもついてまわる。切りたいのに切れない。墓に入るまで持って行かなければいけないだろうと思う。」(1950年生 女性)

(7) マスコミへ

マスコミへの強い期待も語られている。

「時代によってどうなっていくのか。3園長の系統の医者たちが園内で何をしたか、どのような治療をしたのかをマスコミが書いてほしい。マスコミは過去のことを調べて将来どうなるのかの検証をするのが役目。」(1930年生 男性)

「裁判のあと、マスコミが取りあげるようになったが、活字だけでなく、身近な問題をもっとよくしてほしい。医療の問題など日常生活の助けになることをもっと考えてほしい。ほんとによかったと思えるように。」(1941年生 男性)

(8) 権利放棄

当然受けられるべき権利さえ放棄する。それほど病気を知られることへの恐怖は大きい。

「補償金をもらう手続きが、自分ではできなくなったら、辞退しようと思っている(そう決めている)。それは、代筆が必要になったら、自分の病気が知られてしまうからである。」(1947年生 男性)

(9) 国へ - 遅すぎた対策

「国のいろんな対策は遅すぎたと思う。もっと早く、考えてほしかった。年にとってちゃんと生活できるようにはして欲しいが、今はいたって健康。国の方は担当者が次々変わる。いいところまでいっても又人が変わるとともにもどる。ハンセン病問題は根が深い。金銭的な問題だけでなく、心の問題もある。退所者の会も年々参加者もふえてきている。」(1947年生 女性)

「社会復帰後、給与金制度が出来てうれしいけど園側(社会福祉課)の取りあつかいで減給されたことがくやしい。福祉自体も差別をなくしてほしい。全国一律の料金にしてほしい。給与金などで職員と交渉している中でも自宅に無言電話があったり非通知があったりしていやがらせがある。」(1943年生 男性)

(10) 人生の肯定 - 意外と自分はおもしろい人生

様々な、人権侵害、被害を受けながらも自分の人生を肯定する人もいる。そこに、人々の強さとともに、そうしなければ生きていけないほど厳しい状況が示唆されている。

「自分はおもしろい病気にかかったものだ。意外とおもしろい人生だったのではないか。良い人と出会えた(この病気のおかげで)。」(1937年生 男性)